



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	<せっかく ~ のに>文の誤用とその背景
Author(s)	加藤, 由紀子
Citation	[岐阜大学留学生センター紀要 = Bulletin of the International Student Center Gifu University] no.[2000] p.[25]-[37]
Issue Date	2001-02
Rights	
Version	岐阜大学留学生センター (The International Student Center Gifu University)
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3365

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

〈せっかく～のに〉文の誤用とその背景

加藤 由紀子

要旨

日本語の副詞の中には、話し手の価値評価や気持ちを投影するという性質を持つものがあるが、母語に同様の副詞を持たない日本語学習者にとってはその習得は難しいものである。その中のひとつ「せっかく」は、日本語学においても意味論的・構文論的定説が確立していないので、適切な説明が十分にされておらず、より難しいものとなっている。

本稿では、その中でも一番多くの誤用文が出る「せっかく～のに」に焦点を当てて、学習者の作った誤用文の分析から、誤用文が出てくる原因と背景を探った。さらに、その分析の結果と添削の過程から、より適切な文法・用法の説明とその意味的な位置づけを検討して、「構文に関して付加すべき注意点」と「指導のポイント」としてまとめた。また、間接的にはあるが明確に話し手の気持ちを表現する「せっかく」の性質を、その構文を使う時の母語話者の深層心理の視点から考察した。

1. はじめに

日本語の副詞の中には、話し手の価値評価や気持ちを投影するという性質を持つものがあるが、母語に同様の副詞を持たない日本語学習者がそのような副詞を使いこなせるようになるのは難しいことである。その中のひとつ「せっかく」は、日本語学においても意味論的・構文論的定説が確立していないので、その使い方に対する説明が文法書や辞書の中で十分になされていない。このことがその習得をさらに難しくしていると言える。

「せっかく」を使った主な文型として次のものが挙げられる。

- ① せっかくの＋名詞＋だから／なら／だが／でも／なのに
- ② せっかく＋連体修飾節＋名詞＋だから／なら／だが／でも／なのに
- ③ せっかく＋文（主語＋述語）＋から／なら／のだが／でも／でも／が／のに
- ④ せっかく＋だから／だが

これらの中で、本稿では、学習者が作った「せっかく」の文の中でも、一番多くの誤用文が出る「せっかく～のに」に焦点を当て、学生が書いた誤用文のうち典型的なものを分析することから、そのような文が出て来た原因とその背景を探った。また、その分析の結果と添削の過程から、より適切な文法説明と使い方についての説明を考え、最終的に「せっかく」の意味的な位置づけと、それを使う時の話し手の心的背景を考察した。

2. 誤用文の分析をする前に

2.1. 誤用文が出てくる背景

「せっかく」という語には、話し手のある事態に対する価値評価、その事態から当然出てくると

予測される状況と実際の状況との比較、そしてそれら全般の成り行きに対する心情などが反映される。学習者の母語によっても違ふだろうし、このような副詞の有無についての調査結果が世界中の言語について出ているわけでもない。だが、誤用文の収集に協力してくれた中国、韓国、インドネシア、マレーシア、ヴェトナム、ドイツ、スウェーデン、アメリカの学生に聞いたところでは、ここまで話し手の考えや気持ちを一言で反映する副詞はほとんどないか、非常に少ないということであった。そのため、自国語では「せっかく」を端的に翻訳できないので、それぞれの文の背景を考えながら、その状況に応じた言葉で訳すしかないようだ。このことから分かるように、学習者に「せっかく」の明確な概念がないことが、誤用文が出て来る第一の背景として挙げられるだろう。

第二には、「せっかく」の意味や用法が、文法書にも辞書にも十分に説明されていないことにある。日韓辞典、和英辞典、日中辞典、日ポ辞典などは言うに及ばず、文法の辞典などでさえも、用例の羅列とその意味の説明にとどまっているものがほとんどである。不十分な情報を基に作文すれば、間違いが出て来るのは当然である。

2.2. 先行研究

渡辺実 (1996 p.37) は、

「せっかく」はB（後件）が随伴的に成立するという期待と、Bがまだ実現せず或いは遂に実現しなかったという現実とを前提として、Bを随伴的に成立させる可能性を持ち或いは持っていたはずの事態A（前件）を、価値ありと認める話者の評価を表す。

としている。だから「せっかく～のに」文で、その見越したBにはならないのであれば、せっかくのAは無駄になり、残念だ、惜しい、腹立たしいというような心情へとつながると言うのである。この「見越しの評価」という考え方は、日本語の「せっかく」をはじめ「なまじ」「まさか」などの話し手の評価・心情を表す副詞を考える時にも有効であると言えるだろう。

『基礎日本語辞典』（1989 pp.216-217）の記述内容は、渡辺より日本語学習者には分かりやすいものになっている。一般的な「せっかく」についての概略の後に、「意志的行為の場合」と「客観的事実の場合」に分けて説明がされている。前者については

目的が先行して、それに従って実現させた事態が有効に働かないのである。行為者の意志と無関係に、周囲の情勢や事の成り行きから、結果的にその行為が生きない場合と、相手がそれを受け入れてくれない場合がある。そのため行為者にとって“残念だ”という気持ちが生まれる。ある目的に従って行動したことの結果が裏目に出るのである。

と書き、後者については、

結果とは関係なしに存在する事実を、話し手の意識として、ある目的を持たせ、その目的がじゅうぶんに果たされていない（もしくは果たせない）ことを残念がるのである。客観的事実が話し手によって価値づけられ、その価値が何らかの事情でじゅうぶん発揮できないのである。そこに“不本意”な気持ちが生じるのである。連体修飾句「せっかくの」となる例がほとんどである。

と書いている。この視点は重要なポイントである。

この2つの文法説明とその分析は内容的には高く評価されるが、日本語学習者が内容を理解するのは難しい。

これに対して、日本語学習者のための文法辞典・語彙辞典類の多くは、一連の語彙説明だけな

く、文型と用法の説明および用例が提示してあるので、分かりやすく使いやすい。しかし、学習者がすぐ使えることに焦点をあてているために、個々の文型に対する説明が中心となり、「せっかく」全体が見えないという傾向がある。

これらの中間に位置しているものに『ことばの意味3』（1998）、『現代副詞用法辞典』（1999）、『日本語文型辞典』（1999）などがある。例文を多く引きながら、しかも全体像が見えてくる具体的な説明になっている点が、日本語学習者の参考書として高く評価されるが、それでさえ、誤用文が出てくる可能性が認められる。

2.3. 学習者の作文の意図を確かめる大切さ

誤用添削をする場合、日本語教師がまずすることは、その文を作った学習者が言いたいことを確かめることである。明らかに何が言いたいかわかる場合はその必要はないかもしれないが、「せっかく」のような場合は、その副詞が話し手の気持ちを投影するだけに、真意を確かめずには適切な添削をすることはできない。この真意を確かめるという作業は、適切な添削のために有効だという点にのみ注目されがちだが、実はそれだけに留まらない。それを通して、学習者の語の意味のとらえ方や、使い方などが把握できれば、どうしてそのような誤用文が出て来たかを知ることができるという点も見逃せない。それが次の学習者に同じ間違いをさせないためのよりよい説明方法の発見や、言葉の解明にも繋がる側面を合わせ持っているからである。「せっかく」に関して言えば、話し手がその言葉の意味をどこまで広げて解釈しようとしているのかを見極めることと、どの範囲を越えると聞き手が意味の曖昧な文または誤用文であると感じるのかを考えることは、意味論・構文論における新たな視点を見いだすために重要なこととも言えよう。

2.4. 誤用文の収集

誤用文の収集には、51名の中級から上級の学習者に協力をお願いした。また、誤用文を集めるに際して、教師がその語彙について充分説明することは、誤用文のよりよい分析を行うために欠くことができない条件であると考えるので、どのクラスでも、「せっかく～のに」（以下「この構文」と称することがある）の用法については、基本的な例文を示しながら、次のような内容の説明を学生にした。

- 1) 前件は、またとない特別の価値ある事態である。
- 2) 後件は、前件から当然予測される好ましい事態に反して起こったことである。
- 3) 以上のことから、前件の事態を有効に利用できなくて残念だと思う話し手の惜しみ、恨みなどの気持ちが表れる。
- 4) 後件には意志、勧誘、命令のムードを持った文は来ない。

この説明の後、学生の質問に答え、簡単な作文練習をした上で、作文練習で出て来た文以外の内容の文を作るという条件で、それぞれ5～8文作ってもらった。全375文の中から、はっきり誤用文であるものと、誤用文とすべきか迷うもの113文を抽出した。抽出するにあたっては、一部の語が違うだけで文型としては同類とおぼしきものは、そのうちの1文だけを取り上げた。また、誤用の種類が多様であったので全部を分類しなかったが、「せっかく」の本質にかかわってくると思われる典型的な誤用文は、3と4で扱った12のグループにほぼまとめることができた。これらのグループに入れられる文は83文、入れられないものは30文であった。グループに入れられなかった文の誤

用の原因は、語の理解および使用、活用、自動詞と他動詞の混同、授受動詞または動詞テ形+授受動詞における誤用の6つからくるものが主なもので、それらが混合しているものもいくつかあった。また、以下で取り上げた誤用文については、それぞれその文を作った学習者の言わんとするところを本人に確かめた上で分析したものであることを付け加えておく。

3. 学習者の理解が不十分であることから出てくるとされる誤用文

3.1. 誤った理解に基づく誤用

せっかく一晩中卓球をしていたのに、まだ疲れていないんです(例文①)

この文は「せっかく」がなければ問題はない。しかし「せっかく」がつけば、誤用文になる。学習者によると、「一晩中卓球をした」ことは「めったにないことで大変なことを成し遂げたのだからすばらしいことである」と考えたというのだ。それだけ聞くと納得できるような気がしないでもないが、よく考えてみると、前件が「せっかく」の文に出てくるような「またとない特別の価値ある事態」になる状況とは具体的にどのようなものなのかが今一つはっきりしない。また、学習者は「後件は前件から当然予想できることに反して起こったことである」ということは考えたが、この構文の後件の事実が「前件から予想される好ましい状況に反したものであり、話し手にとって惜しみ、恨みの気持ちが出てくる内容である」という条件を忘れてしまっていたのである。

類似する誤用文には、次のようなものがあつた。

せっかくここの料理は高いのに、おいしくありません。

せっかくビールを12本飲んだのに、酔っていなかった。(他1例)

3.2. 辞書の説明の不十分さからの誤用

せっかく雨なのに、バーベキューをした(例文②)

この文は、「せっかく」がなければ問題がないという点では例文①と同様であるが、学習者が間違えた理由はそれより単純であった。この学習者は教室では分かったつもりでいたが、いざ作文をしようとしたら分からなくなったので、和英辞典に出てくるいくつかの例文の訳の意味を総合して、「せっかく」を「まれなこと」「残念なこと」「強調」のために使う語であると考えて、この文を作ったのである。明らかにそれだけではこの構文が使える文の意味内容として十分ではない。類似する誤用文には次のようなものがあつた。

せっかく雪なのに、学校へ行った。

せっかく雨だったのに、庭を掃除した。(他1例)

しかし、この例文②を作った学習者との会話で興味深かった点は、文法以外の事柄についてであった。学習者の母国ではバーベキューは日本人のようにいつも屋外ですると決まっているものではなくて、屋根のあるテラスなどでもオープンでもできる料理法のひとつでしかない。だから、自分の国ではこの文自体の意味が変になるけれども、今は日本にいるのでこの文を作ったと言ったことである。日本ではなく、バーベキューは屋内でもして、雨を恵みと考える国であれば、「せっかくの雨だから、出かけずにうちの中でバーベキューをした。」という文も可能になるのである。「せっかく」のように話し手の感情が文に反映する言葉を使う場合は、その国の文化・気候・生活様式というような背景が、文に影響する度合いも大きくなるという点を見逃してはならない。

3.3. 「のに」の不十分な理解による誤用

せっかくの休みなのに、仕事をしよう（例文③）

この文の前件は問題がない。しかし、この後件がつくと誤用文になる。これは例文①で指摘したような内容の文になっていないために誤用文になった、と考えるのが一般的だろう。またそれに加えて、「せっかく～から／なら」の文では、後件に意志や勧誘や命令のムードを持った文が来るが、この構文には来ないということにも触れて、後件を「仕事をした」「仕事をするようになった」などの客観叙述文に変えるように指示することも一般的な指導内容だろう。

しかし、この学習者の誤用の原因は別の所にあった。初めて「～のに」の文を習った時、「いっしょうけんめい勉強したが、試験は悪かった。」と「いっしょうけんめい勉強したのに、試験は悪かった。」の比較において、「～のに」の文の方が強い気持ちが働くと考えた。だから「せっかく」という強い心情表現と呼応させるには「のに」がふさわしいと思ったのである。確かに例文③を「のに」を使わず、「せっかくの休みだが、仕事をしよう」とすれば、問題はなくなる。同様の考えから出てきた類似する誤用文には次のようなものがあった。

せっかくの休みなのに、仕事をしてください。

せっかくのチャンスなのに、私は行かないつもりだ。（他5例）

これらから分かることは、「せっかく」が理解されていなかったからなのではなく、「のに」の理解において、「前件の事態から出て来ると期待される結果が意に反して出て来ず、後件が起こった」という部分が欠落していたことである。つまり、これは「せっかく」の問題ではなく「のに」の理解に問題があったことから発生した誤用文であったのだ。ここから分かることは、この構文には、当然の事ではあるが、「せっかく」と「のに」のふたつの文法項目があるということである。また、その誤用文は、そのふたつの要素のうち一方が原因であるものと、両方が絡んで原因となっているものがあるということである。「せっかく」には「のに」と結び付いた文が多いため、「せっかく」の文法説明や用例辞典の例文には、「せっかく～から／なら」「せっかくのNが」などと並列にこの構文が出ているが、ここにはふたつの文法項目が含まれていることを忘れてはならない。そして、このふたつが共存しているという認識がないと、適切な添削も、正確な「せっかく」の意味・用法の位置づけもできなくなる。

4. 学習者が「せっかく」を理解していても出てくるとされる誤用文

4.1. 〈せっかくのN〉の被修飾名詞の意味内容

せっかくの努力なのに、仕事はうまくいかなかった（例文④）

例文④の前件に出てくる「努力」のような名詞について考えてみよう。この名詞は「めったにない価値がある事柄／状況」を表す名詞である。学習者が作文によく使う名詞には、「休み」「チャンス」「お金」「プレゼント」「親切」「好意」「料理」「研究」「旅行」「出張」などがある。これらは何の抵抗もなく正しいと感じるのに、以下のものはなぜすなりと受け入れられないのか。

例：「勉強」「洗濯」「努力」「苦労」「進学」「関心」「東大生」「恋人」

まず、なぜ「研究」はよくて、それに近い意味がある「勉強」はおかしいと感じるのか。これは同じ家事でも「料理」はよいが、「洗濯」はだめなのと共通するところがあるように思う。つまり「料理」という言葉は「料理をする」という行為を表すのみならず、その行為の成果として出て来

た「食べ物」という実物がある。しかし、「洗濯」は「洗濯する」という行為は表しても、洗濯が終わった物という意味はない。このことが、「洗濯」が同じ家事労働でもこの構文に合わないと思える理由だと考えられる。これと同様に「研究」はその行動のみならず、それらの成果としての研究結果や研究内容も表すが、「勉強」はその行為しか表さないことが、正誤の違いとなって表れると言える。類似する誤用文には次のようなものがある。

せっかくの修理なのに、車はまた壊れた。

せっかくの相談なのに、まとまらなかった。(他3例)

また、「旅行」「出張」は「料理」「研究」のような行為としての産物はないが、その言葉だけで「好ましい機会」として実際に起こり得る状況が予想できるので、その名詞だけで何も補う必要がないケースである。

「努力」「苦労」「進学」などは、上で述べたような行為の結果出てくるものを表していないことに加えて、それらの言葉からだけでは「好ましい機会」になる状況が明確ではない。特に「苦労」からは望ましくないイメージすら出てくる。しかしこれらは「せっかく努力したのに」「せっかく苦労したのに」「せっかく進学したのに」のように「する動詞」に変えれば、状況がはっきりして問題はなくなる。これに類似する誤用文には次のようなものがあった。

せっかくの復帰なのに、会社が倒産した。

せっかくの運動なのに、なかなかやせない。(他1例)

では次のような文はどうだろう。

せっかくの関心なのに、株で損をした。(他2例)

例文の「関心」のように「する動詞」でなく、それだけでは前件で何が言いたいのかわからないようなものは、「せっかく経済の動向に関心を払っていたのに」のように、前件だけで状況がはっきりするまで言葉を補わなければならない。

もうひとつの誤用のパターンには次のようなものがあった。

せっかくの東大生なのに、犯罪を犯した。

せっかくの恋人なのに、逃げられた。(他1例)

「東大生」と「恋人」も、これだけではどういう状況なのか分からないから、動詞等を補って状況を明確にする必要がある。また、後者の場合、「せっかく」を省いた「恋人なのに」という前件からは、「恋人としてふさわしくない行動をする」などという「前件の常識的な予想からはずれた」後件を導き出す文になる要素も持っている。このふたつの条件が重なるので、より奇妙な感じを与えるのではないかと考える。

これらから分かることは、好ましい機会が期待され、状況がはっきりする名詞でない限り、「せっかくのNなのに」の形は取れないということである。

4.2. <せっかくのNなのに> 節の後件の条件

せっかくのチャンスなのに、がんばらないと後悔するよ(例文⑤)

まず、この構文の後件には、3.3でも述べたように、客観叙述の文しか来ないということを指導しなければならない。ここでは、「なのに」を「だから」に変えれば正しい文になる。実際に、いくつかの誤用文も、この「なのに」と「だから」の使い違いによるものがあった。このように普通は間違わないような文法事項が、「せっかく」に迷わされてか、間違ってしまうというのも興味深

い現象である。

しかしこの場合にもこの文を作った学習者には別の考えがあった。それは予想外の視点を提供するものであった。「『せっかくのチャンスなのに、がんばらない』ということをする、後悔するよ。」ということ、一文で言いたかったのである。確かに「せっかくのチャンスなのに、がんばらない。」という文は正しい。しかし、この文の後に「後悔するよ」を付けると、「がんばらない」と「後悔する」との結び付きが、「せっかくのチャンスなのに」と「がんばらない」との結び付きより強いので、学習者が意図した内容にはならない。これは「のに」が文の中にはっきりした切れ目を作る作用によるものだ。つまり、前件のようなすばらしい状況があるにもかかわらず、その予想を裏切って「のに」の後に出てくる後件のような状況や結果が出て来てしまった、としか理解できないような、文をコントロールする力を持つということである。類似する誤用文には次のようなものがあった。

せっかくの雪なのに、写真を撮らないと残念です。

せっかくのパーティーなのに、遅れると失礼ですよ。(他2例)

しかし、文に切れ目を作る「のに」の作用も、「ので/から」に比べると弱いと言える。次の例を見てみよう。

せっかくの旅行なのに、みんな参加しないので残念です。

この場合は「のに」の後ではなく、「ので」の後に切れ目が来ていることがわかる。そしてそのことが、前の誤用文と一見同類かと思えるこの文を誤用文にしない理由なのである。

4.3. 〈せっかくのN〉の名詞の二面性

せっかくのプロポーズなのに、彼女に断られてしまった(例文⑥)

これは「プロポーズ」という名詞の二面性ゆえの誤用である。「せっかくのプロポーズなのに」だけであれば問題はないのに、後件が付くと変になるのは、「プロポーズ」には「する側」と「される側」があるからである。この例文の場合も、この前件から、聞き手は「プロポーズされた側」が「価値ある事態が訪れて、それを有効利用できる側」であると考えてしまう。つまり「せっかくのNなのに」という構文の主語は「された側」である、と聞き手は自然に判断してしまうのである。しかし後件を見ると、省略されているが、主語が「プロポーズした人」であることが分かる。つまり「せっかく」で導き出される「彼女にとっての好機」が、後件の主語には結び付けられなくなるのだ。このように、聞き手に状況判断を委ねてしまう「せっかくのNなのに」構文から出てくる誤解を避けるための方法は、名詞を文に変えることである。この文も、「せっかくプロポーズしたのに、彼女に断られてしまった。」とすれば、問題はなくなる。

ここから分かることは、「プロポーズ」のように、「する側」と「される側」という方向性を持っている名詞(ex.「招待」「申し出」「お願い」など)を「せっかくのNなのに」で使用する場合は、「好機が訪れて、それを有効利用できる側/受け手」が同時に「そうしなかった人/そうできなかった人」でもなければならぬので、必然的に後件の主語は決まってくるということだ。類似する誤用文には次のようなものがあった。

せっかくの招待なのに、友達にいやだと言われた。

せっかくのお詫びなのに、許してくれない。(他2例)

では、「する側」と「される側」ではなく、二人で決める「約束」のような場合はどうだろう。以下の学生から出てきた誤用文を見てみよう。

せっかくの約束なのに、彼女が来ない。

せっかくのデートなのに、恋人は別れようと言った。

「約束」も「デート」もふたりで決めることではあるが、ここでも「その状況に積極的な働きかけができて、しかもその状況をコントロールできる人」は、文の主体にはなれない。つまり、この構文の中では、「プロポーズ」同様、ふたりの力関係は対等ではないのである。

4.4. 〈せっかくのAN〉節のある場合

せっかくの新しいデパートなのに、お客が来ない（例文⑦）

ここでおかしいと感じるのも、名詞の前に形容詞を付けただけでははっきりした状況が把握できないためである。「せっかく」なしならおかしいとは感じないのであるから、この場合は「のに」が原因なのではなく、「せっかく」がおかしいと感じる原因なのである。つまり、「せっかく」を使うからにはそれが価値ある事態でなければならないのに、この例文が表す状況において話し手が「せっかく」で表現したい価値とは、だれにとってのどのような価値であるかが分からないのである。状況をはっきりさせるためには、十分な説明が必要になる。十分な説明をするためには、形容詞を名詞に付けるだけでなく、「せっかく新しくできたデパートなのに」のように名詞に連体修飾節をつけるか、「せっかく新しいデパートができたのに」のように動詞がある文にすれば、状況がだれにも明確に理解できるものとなり、聞き手も納得する。類似した誤用文には次のようなものがあった。

せっかくの若い社長なのに、昨日事故で死亡しました。

せっかくの大手企業なのに、倒産しました。（他10例）

また、ここに、前件の事柄を有効に利用できる人が、後件で利用しなかった／できなかったという、この構文が持つべき一定の方向性がないことも誤用の要因となっている。このことには4.3でも触れた。

4.5. 〈せっかく〉連体修飾節のある場合

せっかく染めた髪なのに、色がついていなかった（例文⑧）

「せっかくのNなのに」の状況をはっきりさせるための手段のひとつとして、連体修飾節を名詞に付けるという方法があることについては、4.4で述べた。これは有効な方法ではあるが、これでは前件に動詞を持った文がくる場合ほどの意味的な広がりや柔軟性を、文全体に持たせることはできない。そして、このことが後件の文に限定を与えてしまうことがある。

この例文から分かるように、「染めた髪」という形にすると、連体修飾節がタ形であることから、その髪は「染まっているもの」とあると考えてしまう。だから後件に「色がついていなかった」という、前に述べた内容に矛盾する文は結び付けられなくなってしまふ。だからと言って、「染める髪」や「染めている髪」にもできない。この誤用は、動詞の意味構造に対する知識の不足からきている。そこで、前件を「せっかく髪を染めたのに」にすると、この場合は「髪を染める」という行動はあっても、それが「髪が染まった」ことを必ずしも意味しないので、正しい文になる。類似した動詞の意味構造に対する理解不足からくる誤用文には次のようなものがあった。

せっかく燃やしたラブレターなのに、全部燃えなかった。

せっかく飲んだ薬なのに、まだ1種類忘れていた。（他1例）

同じように、連体修飾節がタ形であるものでも、その事が完了したことが前提で後件が出てくるような文では問題がない。それは次のような例である。

せっかく新しく買ったコンピューターなのに、あまり調子がよくない (例文⑨)

では、次の文はどうだろう。

せっかく生まれてくる赤ちゃんなのに、親は嬉しそうではない (例文⑩)

この文は前の例文のようにタ形の問題はなく、「まだ生まれてきていない赤ちゃん」のことを表すのだから、「生まれてくる赤ちゃん」でよいように思えるが、実際には正しい文とは言えない。このように連体修飾節が名詞についたものが前件にくる場合、その名詞がすぐ後件の主題または主語あるいは直接目的語になる (例文⑨) ような、単純な構造の文しか後件にすることができない。だからここでは、敢えて連体修飾節を使うより、「せっかく赤ちゃんが生まれてくるのに、親は嬉しそうではない」とするべきなのである。

このようなことを考えると、特別の場合を除いては、前件には、後件に来る文の内容に対する限定がゆるやかな、動詞を持った文を使った方が間違いが出にくいとすることができる。そして、実際に母語話者は、この構文を用いる時、無理に「連体修飾節+名詞」の形を使わず、文にしていることが多い。ただし、これはこの構文について言えることで、「せっかく+連体修飾節+N」の後には「なら/だが/でも」等がくる時には、連体修飾節を使った文もよく現れる。

4.6. 〈せっかく〉状態性述語節のある場合

せっかくこのテストは簡単なのに、悪い点を取った (例文⑪)

この文の場合、第一に、後件がタ形であれば、前件もタ形になっていなければならない。なぜなら、前件の事実は「ひらがなは簡単だ」というような普遍的かつ一般的なことを述べているのではなく、「話者にとっては好都合な状況の下でテストを受けた」その特定の時のことを表現しているのであり、そのテストを受けた結果が、予想に反して後件のようになったという意味だからである。第二に、これは「のに」の影響による面が大きい、「悪い点を取ってしまった」に変えたほうが自然な文になるだろう。類似する誤用文には次のようなものがあった。

せっかく昨日はバーゲンなのに、何も買わなかった。

せっかくお見合いの相手はいい人なのに、断った。(他2例)

それでは、次の例文はどうだろう。

せっかくそのスーパーは安いのに、お客が来ない (例文⑫)

これは例文⑪に近いように見えるが、問題は別である。この例文のひとつの問題は「そのスーパーは安い」という日本語独特の表現のせいである。実は「安い」のは「そのスーパー」なのではなく「そのスーパーの商品」なのだ。だから「せっかくそのスーパーは商品が安いのに、お客が来ない。」あるいは「せっかくそのスーパーの商品は安いのに、お客が来ない。」とすれば不自然さは軽減される。このように主題と主語が別なのに、主語を省いている文の場合、「そのスーパーは安い」という単文では正しくても、この構文の前件に入ると、意味が曖昧なおかしな文になってしまう。これは、複文の従属節内で取れる意味範囲が、単文のそれより狭いことを意味している。

さて、上のように直してもまだ不自然なのは、前件の内容からでは、恩恵を直接受ける対象が想像しにくいことにある。前件の内容からは恩恵を受けるのはその客であるような印象も受けるが、はっきりしない。また、後件の内容だけで考えると、恩恵が受けられなくて残念に思っているのは、

そのスーパーの経営者であるようにも受け取れる。つまり、前件と後件で主体がずれてくるのである。このような現象は例文⑥⑦にも現れていた。これを解決するには、スーパーの人の行為に視点を置き、はっきりしたイメージに結び付ける文、「せっかくそのスーパーが安くしているのに」などの手法を使うことも有効である。他には「て形+授受動詞」や「て形+おく/ある」を使って、人の行為や恩恵の授受の方向を示した形に変えれば、かなりの事柄をこの構文に入れることができる。また例文⑪⑫も例文①②③⑦と同様「せっかく」を省略すれば正しい文になる。

4.7. <せっかく> 動詞節と後件の不照応

せっかく景気がよくなってきたのに、地震が起こった (例文⑬)

この例文の問題は、「せっかく景気がよくなってきたのに」という情報から聞き手が予想できる後件の範囲を、この後件が越えてしまっているところにある。これは「～のに」の文において後件が表現できる範囲がどこまでか、という問題と同様である。この文の前件に続く後件の内容としては、景気や経済にかかわるものしか選べない。この学習者は、無残に壊れた町の様子とまた経済状態が悪くなるという考えがあったが、長くなるので省略したと言うので、最後まで景気・経済というトピックから離れないようにしながら文を補うよう指示して、「せっかく景気がよくなってきたのに、地震が起こってまた経済状態が悪くなってしまった。」という文に作り替えてもらった。類似する誤用文には次のようなものがあった。

せっかく金利があがったのに、日本にいない。

せっかく買い物に行ったのに、お金がない。(他5例)

それでは、いつも前件のテーマから後件は離れられないかということ、そうではない場合もある。次の例文を見てみよう。

せっかく外国にまで行ったのに、何も買わなかった

この例文のように、前件の内容から後件がすぐに予想できる範囲であれば、どのような後件も付けることができる。つまり、後件は前件から想像・連想できる範囲内でなければならないということだ。

4.8. 前件のアスペクトの問題

せっかく歯を磨いたのに、虫歯になりました (例文⑭)

これは、「虫歯になる」には、かなり時間がかかるにもかかわらず、「磨いた」という動詞のタ形が用いられていることからくる誤用である。「磨いた」であれば一度だけの行為であるように聞こえる。これを「磨いていた」にすれば、過去において継続的にしていたことを表すことになる。それだけでもよいが、「虫歯にならない」という予想が立つほどなら、それに見合う歯磨きの習慣についての副詞なり副詞句・副詞節があったほう自然に聞こえるだろう。例えば「毎日」「一生懸命」「気をつけて」のようなものである。

ここで、注目すべきことは、人が文章を作る時には、「歯を磨く」習慣について考えたり、「虫歯になる」条件やそのメカニズムについて考えたりするということである。それは言い換えれば、一般的な常識に反するような内容が文にあれば、そのこと自体でその文をおかしいとってしまうし、話し手が常識とするものと、聞き手が常識とするものが異なれば、これもおかしいと感じてしまう可能性があるということだ。これは、文法以前の問題である。それは例文②のところでも触れたこ

とであるが、この構文のように話し手の心情を反映する言葉の場合は特に、話し手と聞き手に共通した認識がなければならないということにもつながる。類似した誤用文には次のようなものがあった。

せっかくジョギングしたのに、健康じゃない。

せっかく料理したのに、私は料理が上手じゃない。(他3例)

4.9. 前後件の意味の不照応

せっかく今日は田中さんの30歳の誕生日なのに、まだ結婚できません(例文⑮)

聞き手は前件の内容を聞いた時点で、後件の内容をある程度予想して話の行方を追っている。同様に、話し手も後件の内容をより効果的に述べるために、この構文を有効に使おうとする。だから、もしそのような効果が得られないのなら、この表現を使おうとは思わないだろう。しかしこの例文の場合、前件から予想できる後件は、誕生日にまつわるものであるはずなのに、後件にそのような内容は来ていない。また、前件は後件の内容との比較で、話し手の思いをより効果的に述べるための道具立てにならなければならないのに、そうはなっていない。つまり、この例文の前件と後件では、話し手の内容に対する姿勢がばらばらになってしまっていることが、問題なのである。ひとつの文の中では、話し手は文の初めから終わりまで同様の姿勢を保っていなければならない。類似した誤用文は次のものである。

せっかく早く出かけたのに、集合時間は間違った。

せっかく景気がよくなってきたのに、仕事がつまらない。(他2例)

5. まとめ

5.1. この構文に関して付加すべき注意点と指導のポイント

4で挙げた誤用文の分析から、この構文に関する注意点と指導のポイントは以下のようにまとめることができる。

注意点

1) 「せっかくのNなのに」の名詞は

- ・その語だけでめったにない絶好の機会であること、価値があるものであるという状況が分かるものでなければならない。(4.1)
- ・名詞に「する側・仕手」と「される側/受け手」がある時は、「される側/受け手」が「そうしなかった人/できなかった人」でなければならない。(4.3)
- ・「名詞」だけでも「連体修飾節+名詞」にしても、前件で表現できる状況の内容は限定されるので、後件の内容も必然的に限定される。(4.1) (4.3) (4.4)

2) ル形・タ形の問題

- ・動詞の意味構造によって動詞の形が限定される。(4.5)
- ・前件と後件との時の関係を考えなければならない。(4.6) (4.8)

3) 前件を聞いただけで、置かれている状況が明確に分からなければならない。(4.4)

4) 後件の内容は、前件から予想が可能な範囲にとどまり、それを超えることはできない。(4.5) (4.7)

5) 〈せっかく～のに〉文では、前件が「またとない特別な価値ある事態である」だけでなく、

「それから当然出てくると予想される好ましい状況」があること、そして「実際の結果はそれに反するものである」という3点が備わっていないなければならない。

6) 聞き手と話し手に共通した認識がなければならない。(4.8)

7) ひとつの文の中では、話し手は文の初めから終わりまで同様の姿勢・視点を保っていないなければならない。(4.9)

指導のポイント

- 1) 誤用文の中のかなりのものは「せっかく」なしなら正しいと言えるものがいくつかあった。このような場合は、「せっかく」が使えない文であることを説明した上で、「せっかく」という不要なものを省かせるようにする。
- 2) 「せっかく+修飾節+N+なのに」「せっかく(+Nは)+形容詞のに/なのに」の文には無理が出ることが多い。このような場合は「せっかく+V+のに」の形に書き換えさせるほうが誤りが出にくい。
- 3) 日本における共通の認識とは何かを知る授業をする。例えば、前件から後件を予想させたり、後件から前件を予想させるなどは、このために有効である。

5.2. 「せっかく」の性質

速読の技術を身につける練習の中にはスキミング・スキミングの修得という内容がある。その中の練習のひとつに、内容推測という項目がある。内容としては語彙レベルのものと文・文章レベルのものがあるが、初めにある状況を与えて、その後どんな内容が続くか推測させるものである。これは読む速度を上げるための練習だが、この先を推測するということは母語話者であれば無意識かつ日常的に行っていることである。そしてそれは、読む場面だけでなく、聞く場面においても同様である。

「日本語は述語が最後に来るので、最後まで話者の言いたいことが分からない。」とよく言われる。本当にそうであるなら、内容予測などという練習は全くできないことになる。確かに述語は最後に来るし、肯定なのか否定なのかは最後まで分からない。しかし、実際には接続詞や副詞を使って、結構早い時点から最後に出て来る述語の内容を暗示している場合が多い。このことを裏付ける興味深い現象がある。日本人が英語で文を書く時、文の初めにやたらとandとbutを入れることである。しかし、母語話者の英文にはこれらの接続詞で始まる文はほとんどない。私的な手紙文にも現れないのであるから、堅いレポートなどでは見ることはできない。では、どうして日本語話者はこれらの接続詞を使うのか。それは、英文を書く時、一旦日本語で考えると、それらの接続詞なしの文章では、居心地が悪いと感じるからなのではないか。つまり、それだけ日本語では接続詞を使っているということになるだろう。その反対に、母語話者が日本語学習者の作文を読む時には、接続詞が少なすぎて、流暢ではないと感じたり、理論的につながっていないように感じたりすることも少なくない。

また、副詞・副詞相当句も文の初めの方に位置するので、そこから結論がかなり予測できる。殊に文頭に出て来る「せっかく」は、そんな副詞の典型的なもののひとつである。「せっかく」と聞けば、その後に価値ある内容が出て来ることを予測しながら話を聞き、「のに」と聞くと、「期待が裏切られた」という内容が続くと予測しながらその後を聞くのである。この事実は、「せっかく」が文頭から後へ後へと内容を規定していく副詞であることを意味している。それゆえ、注意点7)

の「初めから終わりまで同じ姿勢を保つ」という事項は、この仕組みのために、どうしても抜かせない項目になるのである。

では、なかなかはっきり意見を言わないと言われている日本人が、なぜここまで強硬な姿勢が保てるのか。まず第一に、この構文では話し手が意見を言わずに、現象だけを述べればよい。そうすれば、聞き手が話し手の心情を予測してくれる。つまり、この間接的な意見・思いの表明の文が、日本人にとって都合がよいのである。次に、注意点6)の「聞き手と話し手に共通した認識がなければならない」に関係するところの、同じ土俵で話ができるという安心感が挙げられると考える。この安心感がなければ、文の初めから終わりまで、首尾一貫して考えを通すことは難しいのではないだろうか。そして、この話し手と聞き手の間の当然の共通の認識こそが、単一言語社会の文化的特徴である。

これらのことから、「せっかく」を使う心的背景を考えて、「聞き手も同じ判断基準を持っていて、自分の心情を分かってくれることを想定または期待して使う副詞」という話し手の深層心理に関する説明を従来の説明に加えたい。

5.3. 今後の課題

本稿は「せっかく」の中でも「せっかく～のに」に絞って検討したので、まだ「せっかく」の全体を観察していない。全体を見るためには、他の文型にあたってみるだけでなく、「せっかく」の類義語である「わざわざ」と比較したり、聞き手の評価を表す他の副詞の振る舞いについて検討したりして、「せっかく」を外から見ることも必要になってくる。今後はこれらの多様な角度から、「せっかく」全体を意味論的・構文論的に考察したい。

謝辞：日本語教育研究会の指導者である成城大学文芸学部教授、工藤力男先生には本稿を書くにあたって多くの助言をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

参考文献

- 國廣哲彌 編 (1998) 『ことばの意味3』 平凡社
グループ・ジャマシー 編著 (1999) 『日本語文型辞典』 くろしお出版
鈴木孝夫 編 (1990) 『日本語講座4 日本語の語彙と表現』 大修館書店
田忠魁・泉原省二・金相順 編著 (2000) 『類義語使い分け辞典』 研究社出版
飛田良文・浅田秀子著 (1999) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版
名柄迪 (1999) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ1 副詞』 荒竹出版
牧野成一・筒井通男著 (1986) 『日本語基礎文法辞典』 The Japan Times
益岡隆志・田窪行則共著 (1991) 『基礎日本語文法』 くろしお出版
三浦昭監修・岡まゆみ著 (1998) 『速読の日本語』 The Japan Times
水谷信子著 (1997) 『実例で学ぶ誤用分析の方法』 アルク
森田良行著 (1987) 『誤用文の分析と研究』 明治書院
森田良行著 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
渡辺実著 (1996) 『見越しの評価「せっかく」をめぐる』 (1996-9 pp.32-40) 『言語』 96年9月号, pp.32-40, 大修館書店